

祖父恩

鐵錚居士
題

乾



心為鏡



平子

平子

平子

平子

といふもふも中よりと河竹其水
 丹田を説く 孝經思重のやうに
 做る乾坤の丹をちと川に
 追慕り意を表す余深感其意為供養
 香多事

晋 弘明
 其角
 堂主

羽
 為梅壽居士菩提授與外孫寺嶋清
 高野山金剛峯寺法統權大教正前長者快極

嘉永二年己酉閏四月廿四日寂

榮松院釋菊芳梅觀居士 行年六十六

蔡遠州掛川驛廣樂寺



五世の法主 龍泉寺住持

いふは 龍泉寺

龍泉寺

寺のうへに 龍泉寺

龍泉寺のうへに 龍泉寺



あはれなるものなり
多分なるの徳なり
龍泉寺のうへに 龍泉寺

追福翁仙

祖父の恩きふ 菊乃白ひひ

いふいふいふいふの 龍泉寺

初瀬に 外江入江の 寛き

といふなるいふなる 龍泉寺

梨子棚の 外江入江の 寛き

水はくしと 水はくしと 龍泉寺

ひひの破きと 龍泉寺

比叡の破きと 龍泉寺

永機

梅幸

春湖

幸

幸

幸

幸

幸

よのひにわの落着の縁ふも
機屋つゝもの匂の後も
郭ち梅むき時を啼きまの
月のなみおる暑いそめ
箱棟の所のふさの檀所す
茵及こぼれ風の廣う乳
才りて峰中し只はさう
持口りて糧を喰ひ
年こそ抗るものとも堤
ゆるりまの跡へいそつて

湖 幸 於 河 幸 於 河 幸 於 河 幸 於 湖

十
赤替し夏は色の竹簀の子
白眼と助のひた誰のつら
早道のめづる事なは授ふそ
わえつきわらさ雪の権け
こねお馳走のやうな遠く
後世この世は後から袖
よみ賣つゝいさゝ恋い昔より
間の歌つゝよみ小塚原
引越し井戸の自由の風の度
常ハ鈍みゝる西の樂師

湖 幸 於 河 幸 於 河 幸 於 河 幸 於 湖

在品のかの店をなすは
 浮く船の底より
 川遠き里のふしの秋寂し
 五寸とありしを赤紙
 滑い人へ底のふしを合せ
 永い雨練の海へちの角
 心形の花の忘りよる盛
 ちの底のふしの春の鳴り

湖 於 幸 湖 於 幸 湖 於 幸

यांचितयाधि सततं ययि सा ।वरक्ता
 साचासपिच्छति जवं स जवं उयसक्तः
 अस्पृकृतंच परितुष्टति काचदया
 धक्तांच तंच मकनंच इमांच मांच

讀音
 イヤム、チンタヤミ、サタム、マイ、サア、
 ンニヤ、ミツ、チエテ、タナム、サア、
 子エ、アンニヤ、サクタハ、アスマット、クルテ
 五テ、パリツシヤテ、カー、チ、ダニヤ、デク
 タム、チヤ、マ、タナム、チヤ、イ、マ、ン、チヤ、マ、ー、チヤ、

印度人蘭昌德拉者自云世尊同鄉
 生也予達之于俄京一日為予以天竺二國
 古文書世尊棄世之詩寺嶋潔氏
 以今茲當其亡祖父尾上菊五郎三十
 三回忌乞予一言予則複寫以與之
 如其讀音則以邦字記之恐失其
 真也
 明治四年五月下澣梁川居士

追遠

梅の白枝もいさへし墓の草
花咲しつゝもいさへし墓の草
霞仙

何れも羅漢のつゝもいさへし墓の草
何れも羅漢のつゝもいさへし墓の草
外若
梅園
相助

瑞雲のつゝもいさへし墓の草
青梅のつゝもいさへし墓の草
香雀
竹松

若子のつゝもいさへし墓の草
若子のつゝもいさへし墓の草
杜若

植付し古樹のつゝもいさへし墓の草
植付し古樹のつゝもいさへし墓の草
是好

多ふくゝ會釈のすゝめ
 所の國より移りて清蓮の
 一と出て啼音の理の
 一筋の通をいふの夏
 忌前や中をいふの初
 青梅の供物の数に
 伸る月の花也五柳
 あらゆる清くさき
 何となく移るや文

尾立
 梅三郎
 音丸
 音丸
 幸水
 梅之助
 竹之郎
 新助
 可島

焼香の招きよき扇の
 中堂より幕張り河

分九
 意之郎

菩提樹の梢を啼る
 経写すれりし
 花ひる如き誓の舟
 寺のり十のや
 遠く風新の扇の音
 年月は夏さるの
 郭る声なり川のな

金咲
 進三
 幸治
 繁造
 梅彦
 金治
 能進

お給ふ清水の葉の摘むら

昌中

豊州

菊のふり夏うの尺名題

花柳

壽輔

紫陽花の輪の紋のすき
爪奏つぬき音のしる雨

兼之助
多見藏

繪のふり夏うの尺名題
早しやふのひたの向
茂る中の一爪の抱柏
帷子のふり夏うの重

高賀
多摩盛
歌山
三猿
秀鶴

形代の屋のふり夏うの

鶴童

魂ハ西方の天ニ飛ち
魄ハ東海の地ニ止り
梅壽居士の追善なり

猫石の形より三十三回忌
とて此の年五十三次

河竹
其水

驚破江南夢一場醒
来無處不春光可憐
水月朧明夜疎影橫
斜送暗香

詠梅

確堂叟



山歌集

二五

確

妻は月夜と

おと人

手紙と花

うゑ人



水烟波、市井門風留

都過遠、却可羅新

詩見梅、新一篇、明月又

黃昏

如

詠雨亭舊作





研

夫山晚柳

日楚深

和言生官
子系澄卷

無



抱雪懷冰四
十年

雪煙墨戲

香

梅幹早春獨占花魁得陽氣之
最先者小陽春後至臘月開花寫
法多墨梅先從幹起枝交女窗面
如龍勁如鐵長如箭短如戟老用
五瓣之者雙層圈法須圓大
圓則尖則類桃長則如杏貴含
不貴放宜穠不宜繁
鄭總論

雲烟外史



桃李莫相妬
天
安元不同猶餘
霜雪態未
十分紅
蘭疇



香元百卉媚不及

此幽芳

豫堂

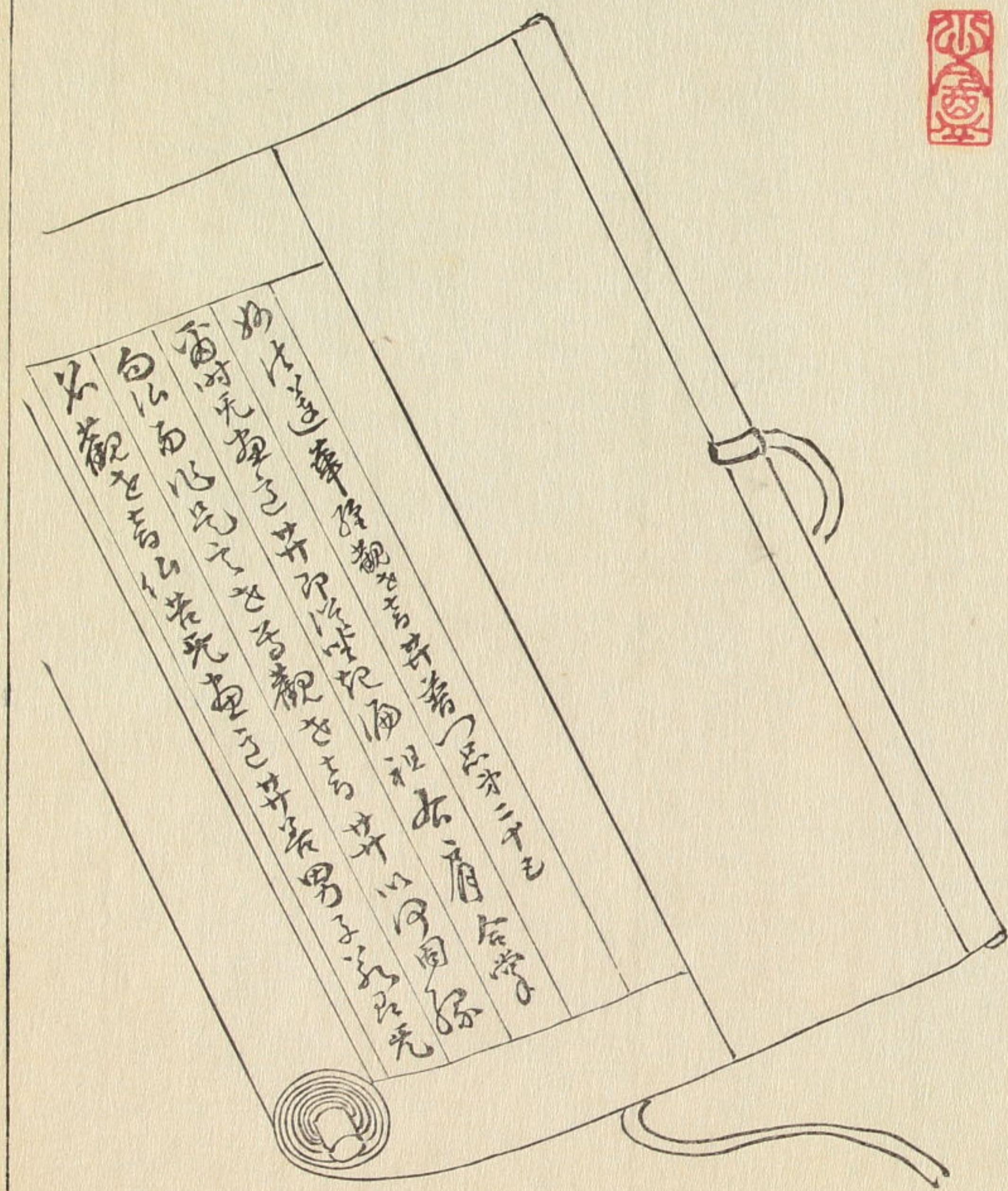


青山梅幸の
祖父に追福

色

香松
花のさかぬ

見る
枝の
あはれ
まはる



音、旋二



明治十四年夏
故梅亭真福

有髮弟子之尾



追善明く蘇又略

梅の實のこぼれて生く哉も
芳しき圓居や夏の菊あり
手向も三十三圓の郭
夏涼しき寺のやうな
五菊の房のやうな
時の夏は扇のやうな
くら外の一隅と青

尋香 予也 雪笠 源坪 宇山 成雅 完略

早起いづちのあけの蓮の花
こけりしのもや髪をのさばる
杜鵑啼や新しむ西の空
香のきりし味をいふの都
花のなほをいふの都
花摘やいふの都
あけのきりし味をいふの都
あけのきりし味をいふの都
あけのきりし味をいふの都
あけのきりし味をいふの都

了雄
富水
大喬
素水
吳仙
精知
五平
苗叟
花叟
採花女

追福

若芽のくちや花の果多
澄の音の遠くやみよ花の
訪ふ人ゆきし梅のこし
大木はわきまのよ歌源
花の山をみよの遠きあり
あけのきりし味をいふの都
根をいふの都

浪巻
房香
開水
苗歌
不角
小窗
文房
徐来

あゝあゝのよみあふしむのそ
親をのこしつて咲し寺乃花
そとあふしつて草や名とて州
似顔繪くわいのよき日と夏と
菩提樹とくわいのよき日と夏と

竹窓
春の
井資
梅兮
流集

あゝあゝのよみあふしむのそ
花咲く三十三回の家の苔
香るあゝのよき日と夏と

仙
甫三
梅宿
連水

あゝあゝのよみあふしむのそ
月宿し柙のよき日と夏と
あゝあゝのよみあふしむのそ
あゝあゝのよみあふしむのそ

遠
西京
稻所
竹苗
藍庭

手向

夏乃あゝのよみあふしむのそ
山乃あゝのよみあふしむのそ
東麓の松乃あゝのよみあふしむのそ

横濱
富貴樓
川むら
高田

麦赤き江村も田の又ある

甲 麦畑

古世阿保院佛堂のよきまて

なまそぬくむしのふにほきあ
こけーみわさるるをくぬのま

二世 梅屋

かきけりく相府へー夏木立
あー花のけーふり

古筆 可悦

茶の色く松をぬりー西施を前
夏菊乃照るもきけぬちのけ

三 八百善 柏

すー笠の佐七尋きん育祭
取けや松乃雪の成流き

六三連 砂燕 高熨

花し香も根株つーー菊も者
あふのきや末廣うさー及保

見連 柳美 住安忌

かひ出にきとや梅乃こぼし種
紅の花乃の白きゆーのけ

水魚連 十足 榮中

是ほの中く一本や初梅
白棠やけさうにちき花の艶

一歩 光賀

こもつふおとと盛る菊の畑
炷とらん片を扇に一ひら
空とらうく刊音の清しめ
梅の美や花の昔よりおの
可居を呼し扇おる思ひあ
棲といふ字沢数とりの夏書け
虫河しやあゝの薫る菊小袖
蓮池やは琴の音りみく池
紫とやあゝの心け 杜若
竹の子の梅を名とふ男櫨

種子
米塘
梅知
綾質
扇亭
交来
龍吟
藍泉
只誠
希川

百無とやゆ揃り上にはく不
土蜘蛛の心けけけの涼風

松呂
三浦

あゝもつ香のこもる花の心
家の風薫る心けけの涼風
あゝもつ香のこもる花の心
似とれり清なりくく歌る
炷りの移り香の心けけの涼風
香を無きしはあゝの心けけの時
——蓮の葉より引たり水の上

豫堂
指在
華谷
孝節
柳一
素直
貴子

短おのりお成なり 伽羅袋
 夏きくやきり 遠き水配り
 よた家へいつとき也は 董る
 白蓮の只り 涼き 心
 はめくかき 旅路のり 水
 実くもく 雨のり
 夏菜のきく 白のり
 いまも 露のり 夏の菊

桐 菊 松
 月 塙 塙
 好 好 塙
 春 春 塙



二橋見女鏡新
粧一曲霓裳
夜來觴江都

晉書

人我浮生半
句事
夢中
只
三
山

三山



風流七家互有
誰才調如梅郎

松齋居士



誰苦為嬌客
三國已矣思
句標脂粉人
誰似吳越做
多少

槐山表氏





辛巳清和月西之官於京西真



簞裘傳數世
淨旦

歷諸家

楊小儼史





歲寒三友
柳園



予為松竹雅士

凌雲書人



芳



おるま

思ひ起すおのほろ

おるま

ふりこせ

おるま

むかへて

ふりこせ



おるま

風節の涼しき扇を

このふりこせ

譲藏東様より建習て

耳のふりこせ

言のふりこせ

一しきふりこせ

梅年

蓮州

晋江

碧海

竜吟

巨石

荷^ウの^ウ種先引するこの稻
好^ウうと^ウ記^ウ也^ウ居^ウゆ^ウ呂^ウ
努^ウる^ウ方^ウを^ウ浮^ウる^ウち^ウ
結^ウの^ウ中^ウハ^ウ何^ウ所^ウに^ウ在^ウす^ウ
軒^ウの^ウ東^ウ梅^ウ津^ウの^ウ東^ウに^ウ有^ウる^ウ
し^ウの^ウもの^ウ後^ウに^ウ出^ウる^ウま^ウる^ウ
蘇^ウ入^ウの^ウ朝^ウ月^ウ祝^ウふ^ウて^ウ互^ウに^ウ相^ウ
揚^ウる^ウ新^ウ酒^ウを^ウ狭^ウき^ウ棧^ウ橋^ウ
城^ウ下^ウに^ウあ^ウる^ウ小^ウ用^ウの^ウ多^ウき^ウ秋^ウ
声^ウう^ウけ^ウる^ウ千^ウの^ウ雨^ウ

櫓^ウ春^ウ
遠^ウ池^ウ
花^ウ城^ウ
子^ウ
竹^ウ江^ウ
向^ウ
所^ウ
石^ウ
城^ウ

丹^ウ波^ウ乃^ウ有^ウし^ウ花^ウを^ウ透^ウす^ウ
釣^ウ灯^ウの^ウ影^ウを^ウあ^ウる^ウ
宿^ウ並^ウ衆^ウの^ウあ^ウる^ウて^ウ寝^ウ也^ウ
黒^ウの^ウ小^ウ神^ウの^ウ皺^ウを^ウあ^ウる^ウ
戦^ウの^ウ中^ウに^ウあ^ウる^ウ若^ウの^ウあ^ウる^ウ
流^ウを^ウ中^ウに^ウ醒^ウす^ウ井^ウの^ウ張^ウ
結^ウの^ウ後^ウに^ウあ^ウる^ウし^ウ
の^ウち^ウと^ウ薬^ウを^ウあ^ウる^ウ
生^ウ酔^ウの^ウあ^ウる^ウ所^ウに^ウあ^ウる^ウ
初^ウ雪^ウの^ウあ^ウる^ウ霜^ウの^ウあ^ウる^ウ

池^ウ城^ウ
石^ウ
吟^ウ
海^ウ
江^ウ
州^ウ
年^ウ
春^ウ
池^ウ

ひとの千鱗運こまのるごとく
 きのの葬具うへを走せ
 ちたふと退入てこの暗い月
 月をみしつた板のつち
 柴栗を湯漬の葉つづみ
 草鞋くくくはてな十年
 ぬくぬくの石のまをわらわら
 鉄の屋大工を職人へおこ
 居たうく遠き昔の花のこ
 空のつらつらに生きたり

春 手 竹 江 向 吹 石 春 城

標壽翁の信
 梅幸右の墓

祖父の仙と羅漢の先新茶

魯文

涼しや音羽の庵りみり
 若菜をくくく柏の
 何くくくたれた柏の
 日のあつてもまのあつた
 標のあつたつたつた

七十六
 柳子 木室 春 城 竹

其引

四五七八所由なる竹

謝元音

ゆるるし初め雲のうら

枕齋

あまの山と成りて熟る

梨塘

松より抱ゆ香の如く

静和

冷と松の葉の思ふ

金羅

こころ啼きしるもみ

空狂

圓なるもの白く梅の

鶴丸

あかりの月ぞ寒川の

酔南

鶴丸乃ち雪の白く

素石

くさすの高音の如く

西京 芥舎

熟公の如く

おまを

多の音の如く

但康

くさすの如く

翠西

まじりて

南

り春のくさす

静所

み葉のくさす

半山

待こり空しつゝ也 郭公
一房の新茶うゝ也 夏心
おとくし 椿き花の柳下
たのきく雨のちも也 田川
郭公もさ 踏の足も月

秋田 喰也
兵庫 宇志
羽後 雪原
甲斐 竹良
駿河 十湖

放しきよもかゝる夜の中
けふもき夜半の石のうね
月あて居るかゝるも
ふゝの中 紫の舟

正義
春江
謝徳
金蘭

たむけける夏の菊のうね
昔の人み のうね

吉登
正雄

ひれの灯の梅雨の思ひ
ほろもき山 雲の中
体は間の新しのちも
さけや灯のちも旅
水多りの峰の雲か
裸灯のちもあき

千美
不及
山
桂子
照
素朴

あふ土の隅のこぼる若草の
わさるも内層の故のほの
人まゝし田面頭の拙
あふしあふれし啼性

大年
お存
晩香
うづ

白葉の上の芳々人の影
わさるも内層の故のほの
あふしあふれし啼性
あふしあふれし啼性

芳洲
波声
あふ
あふ
あふ
あふ

あふしあふれし啼性
あふしあふれし啼性
あふしあふれし啼性
あふしあふれし啼性

花兮
曙を
林華
あふ

あふしあふれし啼性
あふしあふれし啼性
あふしあふれし啼性
あふしあふれし啼性

及古
羊仙
う水
厂峰
毛雪
地生

遠山乃白雲を
結縁のこころ

花、酔ふと煙、目をかへ堤、
 窓、揺して涼むよな、
 夜、味噌の苦、
 角、啼や錦の、
 香、以

梅壽翁の本然清浄心を祀る
 樓韋君の贈る

夏菊やそのむひの譲る
 素行 竺阿弥

糖、淋朝。悪き
 逐、晚風多、
 金、錦、
 翠、

幸と初五
 演劇除厄
 梅壽翁
 田中



开



为梅素佛出初

大東行指蓮華寺主清江守



梵音海潮音
勝彼世間音
汲とりまじ向ふ
ありまじ
厚友梅意



おんまゝに旅に果ていづも風雅の
上のまゝ何ん炮強きまゝねのし
物をとら流石新松より懸絶ぬふ
ふぬその職り榮光也祖父梅翁と
旅り物をよる旅りよりさあつ赴
三十餘年の知り我いといけ
ぬきし聲を御をたなはも
いづも退善の一留せもといふのり

概ありしとて多聞のまはれ
曹子翁の摘三井父の恩にま
深遠なるにいふまゝとあつても
とらふ今又詠めぬ

四
安
子
の
ま
ま
と
い
ふ
ま
ま
と
い
ふ

廣樂寺

五
廿
梅
幸
藏



明治十卯年五月

以一編做室晉齋之筆意

其角堂書



